『安楽集』における境次相接説について

研究生　杉山　裕俊

本発表では『安楽集』第二大門所説の境次相接説について、その根拠となる弥陀浄土初門説、並びに娑婆穢土末処説が提示された背景を探るとともに、道綽の浄土教思想における境次相接説の位置づけを再考した。

第一に弥陀浄土初門説について、道綽は十方の浄土はみな浄らかであり、その浅深をはかり知ることは難しいが、阿弥陀仏の浄土はあらゆる浄土の初門であると述べ、『華厳経』を経証として引用する。確かに先学が指摘する通り、道綽の弥陀浄土初門説は『華厳経』を典拠としていることから、阿弥陀仏の浄土を低位に設定するものとも理解できる。しかしながら、これを道綽自身（＝現世を生きる往生人）の視点で捉えた場合、娑婆世界で願生心を発し、仏道修行を実践した衆生が往生する浄土は、まさに「初門」である阿弥陀仏の浄土以外あり得ないということになる。したがって、道綽は弥陀浄土初門説によって浄土の優劣を論じようとしているわけではなく、自らが住む娑婆世界と阿弥陀仏の浄土が、現世と来世という時間軸上において唯一連続した世界であることを証明しようとしているのではないだろうか。

第二に娑婆穢土末処説について、道綽は畜生が互いに喰らい合う斯訶世界と比べ、娑婆世界は仏道を歩むことができる有情の住む世界であるから穢土の終処であるとしている。道綽がこのように言い得た背景には、①釈尊という仏が娑婆世界に出現したこと、②一度出現した釈尊が八十歳をもって入滅したことの二点が関わっていると考えられる。すなわち、道綽は娑婆世界とそこに住む衆生をそれぞれ悪世界・悪衆生と規定する一方で、娑婆世界には釈尊という仏が出現し、八十歳をもって入滅したとはいえ、その教えは末法である現在も遺っているということを強調している。そして、今時の衆生はみな過去世において仏教と縁があったからこそ、現世で釈尊が遺した教えに遇うことができるのであると主張する。こうした娑婆世界における釈尊の出現と不在、さらには過去世の宿因を背景として道綽は娑婆穢土末処説を提唱し、娑婆世界と境次相接の関係にある阿弥陀仏の浄土へ往生すべきことを勧示するのであろう。

以上、道綽は弥陀浄土初門説によって娑婆世界と阿弥陀仏の浄土を現世から来世という連続した時間軸上に捉えていると推察され、そこには末法の衆生が往生できる浄土は阿弥陀仏の浄土以外あり得ないということを説かんとする道綽の意図がうかがえる。また娑婆穢土末処説では、主に釈尊の出現と不在から娑婆世界を穢土の末処と位置づけ、阿弥陀仏の浄土と相接関係にあることを顕示しているように思われる。これらの両説によって『安楽集』の境次相接説は成り立っており、この境次相接説を通じて、道綽はすべての衆生に六道輪廻の終処に立っていることを自覚させると同時に、西方極楽浄土への願生を強く促しているのではないだろうか。